長崎県地方史だより

第79号

題字　小曽根　星堂　先生

近世日本と「唐兵乱」―太平天国進軍の衝撃―

松尾　晋一（長崎史談会）

・幕末における海外情報

近世日本と東アジアとの国際関係は、限定された場所（北から松前・対馬・長崎・鹿児島）を通じてヒト、モノ、カネなどの往来があった。本報告ではそのなかでも情報に注目し、日本にもたらされたものが日本社会にどういった影響を与えたのか、考えていく。情報といっても、ここでは太平天国進軍（一八五一―一八六四）を対象とする。

太平天国の乱は、洪秀全を指導者として南京を天京に改めて国都に定め、北抜、征西軍が勢力を拡大していく。結局、内紛や英仏軍の参加で形勢悪化して鎮圧されてしまったが、東アジアに大きな影響を与えた。当然日本もこうした情報が伝わるが、アヘン戦争やアロー号事件の情報のような分析がなされてきたとは決して言えない。ここに注目する意義があるのだが、実際、情報は琉球―薩摩（島津家）、朝鮮―対馬（宗家）、中国・バタビア―長崎（幕府）といった具合に異なるルートから、情報ソースも違うさまざまなものが日本に伝わった。こうしたなかで、長崎にどういった特質が見られるのだろうか。

一．海外情報流入ルートとその特質

日本に入ってくる太平天国進軍の情報は、一八五三年一月に九江・安慶を攻略し、二月一〇日に南京を占領するに至る経緯から伝わってきた。まず長崎へは、同年七月オランダ別段風説書で入る。当時唐船の長崎来航が少なかったことに因るが、琉球へは一八五三年三月福州（琉球館がある）からの情報として那覇へ入る。その後、五月二三日馬克承（朝貢使）が福建五虎門を出帆して琉球に至り、ここで得られた情報が薩摩（鹿児島在番）へと伝わった。これが島津家家老座書役へ、そこから江戸に伝わった。この他にも、琉球へ渡航した薩摩商人を介して入手した情報もあった。琉球にとって太平天国の問題は、明清交替に匹敵するとの評価もあり（渡辺美季『近世琉球と日中関係』）、そうした琉球の危機感が影響してか島津家へすぐに伝えられている。その後島津家は、長崎でオランダ商館ドンケル＝クルチウスに「中国の反乱についてロシア人はどんな意見を持っているか。」と質問している。これは一八五三年一〇月二一日のことで、島津家が東アジアの情勢、特にこの当時日本が最も懸念していたロシアの動きを強く意識していたことが知れる。これにドンケル＝クルチウスは、「現行の制度は私が単数及び複数の藩主と文通することを禁止している。明確な情報を与えられていない私は口頭

目　次

・近世日本と「唐兵乱」―太平天国進軍の衝撃―……松尾　晋一……1
・洋画家野口彌太郎の長崎滞在―昭和二七年の展示会を中心として―……入江　清佳……2
・「佐世保鎮守府」設置への考察……祖谷　敏行……4
・主題「泥谷（ひじや）一族の研究」……中島　眞澄……5
・地方史研究会及び県内各加入団体の活動状況……7
・事務局より……10

でさえ殿下の質問に答えることができないと応答した。」（フォス美祢子編訳『幕末出島未公開文書　ドンケル＝クルチウス覚え書』）。長崎における海外情報の統制のあり方の一面が、こうした記録から知れる。

ところで、太平天国進軍の情報に最も敏感だったのは朝鮮であり、日本以上に海外情報を手に入れるチャンネルを持たなかったので対馬（宗家）への期待は高かった。朝鮮は長崎に唐船が来航することを知っており、長崎に入る情報に期待した。

とは言え、公的に情報を得ようとはしていない。応接担当の接慰官につく訳官（講定官）から宗家側の通訳という水面下の動きであり、事が知れたら命がないなかでのことだった。記録には、「中国之盛衰は畢竟朝鮮国之時躰ニ茂相拘可申品々」（「北京筋兵乱記録」韓国国史編纂委員会所蔵）とある。朝鮮は中国の王朝と一体化した存在であり、国家存亡に繋がる危機との意識をもっていたのである。

北京からの情報は、朝鮮の商人にも不安を与えていた。商訳（商人の通訳）義如は、「薬種類抔茂高直ニ成候歟」と宗家側に尋ねている。大陸で起きている混乱はアジアの政治・経済の問題で、日本もその影響を受ける可能性があると宗家も容易に理解したであろう。そのためこうした情報は、館守俵郡左衛門から国元へ、そして江戸（一八五三（嘉永六）年六月）、長崎へ伝えられた。同年一〇月には、紫禁城の近くまで囲まれ、兵糧米も覚束ないとの情報も伝わっていて、東アジア再編の現実味を、朝鮮、そして宗家、幕府も感じたに違いない。

以上紹介した事例から、東アジアの現状を大きく揺さぶる事象であったために、日本へはそれぞれ異なる地域的課題を前提とした情報が、長崎、薩摩、対馬から入ってきたことがわかる。ただ長崎の場合、他とは異なり情報が入っただけではすまなかった。

二、太平天国の乱と長崎

日本に入った情報で大陸の状況を確認すると、例えば南京は、「（一八五三年）二月十一日南京城被奪取、城中之死骸幾千万共不相知、且幷童子共焼死致し、血地ニ積三寸、川水も花汁のことく見へ、不歎者無之。」といった状況であった。南京はまさしく血の海。こんな情報が伝わっていた。そして南京の東に位置する蘇州に関しては、「追々蘇州表江攻掛り候由にて、彼表別して及騒動、大小家々店々門を閉、遠方へ逃去、言語道断之事ニ候。」とあって、危機への警戒感、そして凄まじい混乱が伝わってくる（『薩藩海軍史』上巻）。これらが日本人や日本に強い衝撃を与えたに違いない。だが、これら以上に衝撃を受けたのは、唐人屋敷に滞在中の唐人たちだった。長崎に来る唐船は寧波から来る。寧波近郊は混乱していて船を出せる状況ではなかった。船が長崎に来なければ帰国することもできない。

同時期、長崎でロシアのプチャーチンと交渉した川路聖謨は、日記に「この節は夏船・冬船共に来らざる故に、帰ること能わず。其上故郷は戦争のちまたと成り、日日合戦やむ時なしなど聞ゆれば、哀しみて、日ごとに関帝堂みくじをとり、或は泣き、或は色を直して死する如くなり居るよし也。砂糖其外共に遣い切りて、みな市中より買上なりと承る。唐人共貧相なるけしき、亡国の民となれば、相までもよからぬにや。」（川路聖謨『長崎日記・下田日記』）と記している。故郷が戦争状態にあって、不安を抱えた唐人たちの様子が、川路の目に入った。川路は、「亡国の民」となれば人は人相まで変わると認識したのである。

話を唐人に戻すと、彼らは動いた。一二家在留船主江星棠・楊少畲が長崎会所年行事へ、家族の安否確認のために船を貸してくれと願い出たのである（一八五四（嘉永七）年二月「船借受帰国の件」『幕末外国関係文書五』）。実は、対岸でも動きがあった。長崎と貿易を続けないと死活問題だから、乍甫から二隻の船が長崎を目指したのである。一隻は同年七月一〇日にでて七月二二日長崎に到着した。もう一隻は同月一五日に出船して同月二七日長崎に辿り着いた（『幕末外国関係文書七』）。後の安政七（一八六〇）年の記録によると、女・子供までもが長崎に避難してきたことが確認できる（「唐国賊乱ニ付避難の署記」長崎歴史文化博物館収蔵）。

長崎の場合、太平天国の勢力拡大が貿易や長崎の唐人社会に直接的に影響を与えていたのであった。

・幕末研究の可能性

日本は複数のルートから海外情報を得られる状況にあった。太平天国進軍の情報は三ルートから入っていて、これからだけでも東アジア全体に影響を及ぼした大事件であったことが知れる。アヘン戦争とアロー号戦争の影響を受けて日本は変化したととらえられがちだが、長崎の影響をふまえるならば太平天国の存在も無視できない規模の事件であったわけで、この影響をふまえた幕末研究が、これから必要であることは誰の目にも明らかであろう。

（付記）本研究は、ＪＳＰＳ科研費１８Ｋ００９７０の助成を受けたものである。

洋画家野口彌太郎の長崎滞在
―昭和二七年の展示会を中心として―

入江　清佳（長崎史談会）

はじめに

野口彌太郎（一八九九～一九七六）は、大正から昭和にかけて二科会及び独立美術協会にて活躍、その業績により、日本芸術院会員にもなった洋画家である。

流暢な筆致と天成のものと評される色彩に特徴を持ち、昭和四年

（一九二九）にヨーロッパに渡るとフランス市庁買い上げとなった《港のカフェ》など洒脱な作品を描いた。帰国後は、昭和五年（一九三〇）に二科会から独立し結成された独立美術協会に在籍し、独立展を中心に活動する。野口は国内外を広く旅し、土地の風景やその中で生きる人々を生き生きと描いた。昭和二〇年（一九四五）以降は国内では戦前から取材していた北海道と父親の出身地である長崎を特に熱心に描いている。

野口が長崎を頻繁に訪れた昭和二〇年代から三〇年代にかけては、中央画壇で活躍する画家たちが多数長崎を訪ね、個人の展示会や団体展が盛んに行われた時期でもある。地元の画家の間でも昭和二〇年一〇月に長崎洋画クラブが結成され、昭和二五年（一九五〇）には長崎市美術振興会が創立、一一月には第一回長崎市美術展（現在の長崎市民美術展）が開催されるなど、美術に対する機運が高まっていた。

昭和二七年滞在に関する資料

ここでは、昭和二七年（一九五二）の野口彌太郎の長崎滞在について、滞在中五回行われた展示会の中でも特に長崎で行われた独立展長崎巡回展（以降独立展と呼ぶ）、長崎風物・長崎の女・独立五人洋画展「野口彌太郎・吉岡憲・杢田たけを・山本正・末永胤生」（以下、独立五人洋画展とする）を中心に野口彌太郎の日記、当時の新聞記事等を用い、長崎滞在を検証する。

なお、昭和二七年の野口彌太郎日記については留意する点がある。この年、野口は一度日記帳を紛失しており、二月一六日の日記に「浜屋会場、医、会館見分途中で日記帳を紛失す」とある。その後、三月一四日に「日記帳来る」と書かれており、この日に新たな日記帳が届いたようだ。以上の理由により、昭和二七年の日記については、二月一五日以前の記載が欠落している。

独立展長崎巡回展

野口彌太郎日記と妻の菊枝の日記から野口は、昭和二七年一月三〇日来崎したと考えられる。その後二月一日には、独立展が開催された。一番早い記事は、『長崎日日新聞』一月二一日の記事で「第一回〝独立展〟開く来月一日―一〇日・勝山小で」と見出しがついており、記事には「独立展の創立二〇周年記念展でもあり独立美術会員らの優秀作品百点が出品される」とある。

加えて、『長崎民友新聞』二月一日に「美術愛好家待望の長崎市、長崎市美術振興会主催「独立美術展」はいよいよ今日一日から長崎市勝山小学校講堂で幕をあける」と書かれている。ここには書かれていないが、団体展なので独立美術協会も主催者であったと考えてよいだろう。

野口の出品作品については、『長崎日日新聞』一月二九日によると「出品は諫早市出身の同会の巨匠野口彌太郎画伯の『裸婦』『F婦人像』を始め（中略）特に野口画伯の昨年五月浦上天主堂で筆をふるつた大作『永井博士の名誉市民葬』が出品されることになつている」と出品作品について触れられている。以上から、独立展の出品作品数が約一〇〇点、主催者が独立美術協会、長崎市、長崎市美術振興会、野口の出品作品が《裸婦》《F婦人像》そして、記事と作品名が異なるが《長崎の離別―永井博士の昇天―》が出品されていたことがわかる。

独立展開催に伴い、二月一日午後三時から会場にて長崎市美術振興会主催の座談会が開催された。この様子は、二月四日の『長崎日日新聞』に掲載されており、野口、高畠達四郎、松島正人、山本正、吉岡憲ら独立美術会員と長崎洋画クラブ、佐世保洋画クラブ両会員らが出席したと書かれている。なお司会は、長崎の洋画家で長崎洋画クラブ会員、後の長崎市美術振興会副会長となった山田正孝がつとめた。

長崎風物・長崎の女・独立五人洋画展の開催

三月二一日～二四日、独立五人洋画展が開催され、野口及び独立美術協会の後輩にあたる、同会会員の吉岡憲、山本正、杢田たけを、末永胤生が参加した。この展示会は長崎美人を野口ら画家が描き、中央の公募展に出品する一連の企画と連動していた。まず、『長崎日日新聞』昭和二七年二月六日に「絵になる長崎美人　独立展三画伯の熱望に応えて本社が主催モデルを募る」という募集記事が掲載された。記事によると長崎日日新聞社、長崎市、長崎市美術振興協会が協力しての企画であった。

「野口彌太郎日記」二月二一日に「長崎美人しんさ会」との記載がある。これは、『長崎日日新聞』二月二七日の記事に長崎美人を選ぶ選考会が精洋亭にて二月二一日に行われたという内容と合致する。また、同新聞には二五日から各画家が長崎美人を題材とした制作を開始したとも書かれている。

三月三日の「野口彌太郎日記」に「浜屋会場決定」と書かれていることから、この日に展示会の会場が決定したようだ。新聞に会場決定の情報が出たのは、『長崎日日新聞』三月五日で「野口画伯らが描く「長崎の女」二カ月に亘る快心作二一日から四日間浜屋デパートで作品発表」と見出しがついている。

三月二一日の展示会開催にあたり、前日三月二〇日の「野口彌太郎日記」には「作品を会場へおくる。4時30分～5時開場飾りつけ」とある。また翌二一日に「3月21日（金）（独立五人展）快晴　9hかき30F、10Fを会場へはこぶ」と書かれている。なお翌二二日には「会場へ作品ベルニーとゞけ」とあり、作品を追加したようだ。また、「似顔をいろいろ」とも書かれており、これは同日、長崎日日新聞社が募集した市民の似顔絵を、画家たちが描くイベントを指していると考えられる。一方、新聞にも三月二一日から独立五人洋画展が浜屋デパートで開催されたと『長崎日日新聞』三月二二日に伝えられている。似顔絵のイベントについても、二三日の新聞に盛況な様子が記

事になっている。

「野口彌太郎日記」三月二三日には「1h kankoHotel・3h長崎女性との会談」とある。『長崎日日新聞』昭和二七年四月一日の記事にも「長崎美人を語る「独立美術」五画伯の女性観」と三月二三日に長崎観光ホテルでモデルを労う懇親会が開催されたことが伝えられている。なお、長崎美人の絵画を中央の展示会に出品するという企画の目的は第一回国際美術展に《みどり嬢》《黒ショールの女》が出品されたことで、果たされたようだ。

独立五人洋画展は盛況のため二五日まで一日会期を延長し、最終的に五日間で一万人が入場した。

おわりに

昭和二七年は独立展・独立五人洋画展の他に三回展示会が実施され、野口家の本拠地である諫早、親和銀行の北村徳太郎、佐世保玉屋の田中丸善三郎など協力者の多かった佐世保でも行われた。

昭和二七年の長崎滞在は、他の年と比較しても滞在期間が長いのが特徴といえる。昭和二一年野口が戦後長崎を訪れ、長崎を描き土地の人間との人脈を広げた一つの成果が、新聞社や行政、長崎人と行った、昭和二七年の五つの展示会と長崎美人を描く企画の成功であったと考える。

「佐世保鎮守府」設置への考察

祖谷　敏行（佐世保史談会）

本項は、佐世保鎮守府は、どのような経過を経て誰によって決定づけられたかをさぐってみるものである。

海軍は、人と港湾と修造設備の三本組織が整わなければできない。明治政府は旧幕府と諸藩から艦船の献上を受けて軍艦の確保ができ、教育は陸軍が仏式、薩摩・佐賀などが英式の教育を受けていたので、明治三年（一八七〇）一〇月英式に統一し、艦船の拠点を四年七月、「要港ヲ撰ヒ府トナシ、沿海管下湾港ノ兵備ヲ分轄ス」とした「海軍提督府」という官庁を設けることとした。陸軍の鎮台に相当したが、官制に規定されただけで実施されなかった。

そして、五年一〇月「海軍省条例」に、提督府を「付近の諸港ヲ管轄シ、東京並外六箇所ニ分守スル事」と定め、五年一一月に横須賀に設置する事にしたが、八年一〇月東西に分け、「東部提督府」を横浜に置き、一六隻の軍艦を二分して両指揮官の指揮下に置くことに変更した。同年一二月海軍省は「提督府の名を鎮守府」と改め、東海鎮守府を横須賀に、西海鎮守府を長崎に設置の申請。二鎮守府制の発足を考えたが、西海鎮守府は未設置となる。

創設期から沿岸防衛論は論議されていたが、政府は士族や農民の反乱一揆の鎮圧に忙殺され、一二年頃から朝鮮に絡んだ清国・露国との関係悪化により、一四年一二月、川村海軍卿は一五年以降二〇カ年で六〇隻の軍艦建造及造船所建築を政府に上申したが、経済的理由から否決された。翌年再度提出するや朝鮮問題が議会に理解され、一六年度から八年間に三二隻の建艦と造修設備案が承認された。

しかし建艦内容について論争が起こる。仁礼景範は、「洋外ニ戦フ目的ヲ以テ艦船構造ノ計画ヲ為ササルヘカラズ」と大型艦を建艦すべきと主張した。赤松則良は、「外洋に出て戦う艦隊よりも、水雷船を多数備えた海防艦隊を整備すべき」と巡洋艦と水雷船からなる艦隊編成意見を上申した。両論は艦隊の造修基地の設置にも影響することになる。

海軍が混迷していた同時期、陸軍にも仏式から独式への転換論が生まれていた。政府は一七年二月、大山巌陸軍大臣・同少将桂太郎等を、欧州へ軍事視察に派遣した。

一方、海軍も一七年七月「政府ニ於テ本邦南部ニ二カ所ノ鎮守府創設ノ議アリ広島湾大村湾伊万里湾三所ハ其予定地ナリシモ実測ノ上ナラテハ容易ニ其利害得失ヲ利スルヲ得ス本年該方面ノ測量ニ当リ肝付少佐ハ仁礼少将ト測地ニ会シ其意見ノアル所ニ従ヒ幾多ノ艱難ヲ冒シ特ニ従事シタ」とし、肝付と仁礼は現地調査を行い、一二月に「西海鎮守府及艦隊屯集場ヲ設置スヘキ意見書」と「巡視諸要地ニ対スル意見書」を海軍卿に提出。九州沿岸及び諸島を守るには、「強大ノ艦隊ヲ備エフルヲ要ス。此艦隊ハ敵艦隊ヲシテ、対馬海峡及大隅海峡ヲ通過スルヲ得サラシメ、沖縄・五島等窺フ敵艦ヲ掃攘スルヲ要スルモノナカルカ故、其根拠ハ安全ル港ニシテ、軍艦ニ小修理ヲ加フルニ適シ、適当ナル防備ヲ有シ、且前諸島ヲ警備スルニ便宜ナル位置ヲ要ス。此目的ニ適当ナルハ佐世保ヲ以テ第一トス」と論じた。

大山視察団は欧州全般を視察して、一八年一月下旬に帰国して、沿岸防備は守りを全面にした仏海軍方式を採用することとし、海軍知識と建艦技術とを併せ持つ仏人エミール・ベルタンを一九年二月に招聘したのである。

ベルタンは仏の秀才が集まるムルト・エ・モクニックの海軍技術部卒業で、横須賀造船所の創設者ヴェルニー、旧幕府軍事顧問団のブリューネもこの学校の卒業生である。この後、海軍技術応用学校を修了し、海軍技術師としてジェルプール軍港に勤務、一八七九年に英国へ留学した。その後、艦船の通風装置の研究で有名になる。ベルタンの来日の要素は、造船技術の国産化運動の一環であったと考えられる。また、横須賀造船所創設者ヴェルニーは、ベルタンを高く評価し、造船所内に設けた学舎の日本人生徒多数を留学させており、

ベルタンは日本人の技術度を把握してもいた。

ベルタンは、海軍省顧問兼海軍工廠総監督官兼艦政本部付勅任（少将）という最高の地位だった。主に艦艇の設計や工事を担当した。二月、仁礼と赤松両論に折衷案的な艦船新造計画を提示し、軽艦に重砲を搭載し、日清海戦に活躍した三景艦（厳島・松島・橋立）を完成させた。鎮守府設置案については、政府はこれまで川村が提唱していた四鎮府設置案を退け、仏の五鎮守府設置案を採用する方針をうちだした。

一九年三月、海軍軍事部は、将官会議の承認を得て、「沿海区画並鎮守府設置軍事部意見」を決定し、五鎮守制を明らかにした。同意見書の内、第三鎮守府について「筑前国遠賀・宗像郡界から九州西海岸に沿い、日向・大隅国界に至る海岸海面及び壱岐・対馬・沖縄諸島の海岸海面」とし、「区内の沿海の警備、艦船の造修、予備艦船の管理及其準備、諸兵の徴募及定期復習、予備兵の統轄及定期復習、兵器石炭糧食他軍需品の配給、兵器水雷の修理」ができる事を指定場所とした。

一九年四月、ベルタンは樺山海軍次官、佐藤鎮雄中佐、等を伴って呉・佐世保を視察した。そして『一八八六年四月中査究セル海軍々港用地ノ総体ニ関スル意見書』を提出している。その中で佐世保に関して、「佐世保ハ日本帝国ノ南西ニ在テ攻戦ノ時ニ於テ日本海軍ニ其本拠タルノ用ヲ為シ又平和ノ時ニ於テハ其軍備ノ中心タリ。同所ノ主タル者ハ石炭置場及糧食、諸消耗品等ノ倉庫ニシテ其準備品ハ時々新陳代換スル事ヲ要セリ故ニ船艦其準備ヲ為ス為メ平素■地ニ寄泊スル事ヲ要セリ之シニ加フルニ佐世保ハ■モ江田湾ノ如ク海軍徴兵ノ中心地タルヲ以テ亦一所ノ水兵屯営ヲ設クベシ夫レ以上ハ陸地ニ要スル建築ニシテ此外直接ニ船舶ヲ■纜シ得ベキ桟橋ナキヲ以テ先ヅ急務トスル所ハ石炭船ヲ繋留スル埠頭並ニ■船ヲ修覆保存スル小造船台ヲ建築スルニ在リ又今ニシテ佐世保ニ於テ激戦ノ後、大破シ自ラ呉港ニ航行スル事能ハザル船艦修覆ノ方法ヲ講シ以テ将来ノ為メニ計ルヲ良シトス。抑モ現時ニ在テハ長崎港ハ日本ノ南端ニ於テ船艦ニ充分資力ヲ供給スル所ト看做スヲ得ベシ。故ニ敢テ本港ノ論題ヲ提出シ今方サニ研究中ノ論題ヲシテ一層繁雑ナラシムルヲ要セス又呉造船所ノ盛ニ船艦ノ製造ヲ為スニ至ル迄敢テ費額ヲ此等ノ諸港ニ分賦スルヲ要セス。但預メ可及的速ニ佐世保ノ船渠及ビ工場等ノ計画準備ヲ怠ラザルヲ要スルナリ。私有ニ係ル長崎造船所ハ余ガ前陳セル如ク一時佐世保ノ補助タル所ト看做サザルベカラズ。海軍省ハ戦時必要アレバ乃ケ徴発令ニ因リ此造船所ヲ使用スベキヲ以テ其繁栄ナルハ則チ海軍省ノ■望スル所ナリ」と述べている。

これを受けて、海軍大臣は、各鎮守府の位置を造船所を含めて、一九年四月二二日に第三鎮守府を佐世保港と定め、五月四日、勅令により佐世保鎮守府設置が交付された。

（■は原文の判読不能）

主題「泥谷（ひじや）一族の研究」

中島　眞澄（佐世保史談会）

はじめに

相浦富士と昔から呼ばれている愛宕山（飯盛山：二五六メートル）は、中世に宗家松浦と平戸松浦の攻防の中心であった。その中腹の門前という箇所に一三基の墓碑が残されている。墓碑の名は泥谷一族のものである。しかし、泥谷姓を名乗る人は佐世保には存在しない。本研究の出発点はこのことであった。

一．泥谷を調査する理由

①相浦に墓所はあってもその実態は不明である。

②これまで泥谷氏のことを誰も研究していない。

③泥谷を名乗る人も佐世保には不在、史料も殆んどない。

④秋月種実の五女が、一八代宗家松浦丹後守定の妻と記した研究があった。どんな経緯でなったのか調べてみた。

⑤五女の付人として泥谷一族が相浦にきた様相が不明。

二．佐世保で知る泥谷一族

㈠五女の縁づいた一八代定は、平戸藩主松浦道可隆信の孫に当る。父一七代親は天正二年（一五七四）家臣と刺し違え他界した。定は四歳で宗家を継いだ。

㈡天正一五年（一五八七）五月八日、豊臣秀吉が九州の平定を終了した。島津義久が降伏したことで、九州の国割をしている。九州で島津氏とともに秀吉に抵抗し、頑強に戦い続けた秋月長門守種実は秀吉に降伏し上洛、長男の種長は高鍋三万石に移封された。その秋月種実（一五四五～一五九六）の五女が宗家松浦丹後守定の室になっている。

㈢その秋月種実の娘の付人として相神浦に来たのが泥谷刑部直貞と二男泥谷孫兵衛である。秀吉の起した文禄の役で、定は小西行長の配下として松浦鎮信（法印）に従って従軍、朝鮮・明連合軍に平安道で大敗、家臣と共に討死、年は二三歳であった。

㈣一八代定は「前丹州大守春叟永芳大禅定門」として相浦町の金照寺の境内に祀られている。その横の妻の墓碑は「明窓祖心大姉」としてあり、慶長一七年（一六一二）八月二七日没とされている。定の死後約二〇年近く生きていたことになる。天正一八年（一五九〇）に泥谷刑部は他界、定の死の三年前であった。以後の泥谷氏の活動の舞台は平戸になる。また、明治維新後、平戸から泥谷氏が移ってきたのは門前付

近だったと推察される。
(五)平戸市の松浦史料博物館で『藩臣録』泥谷一族の史料が手に入り、豊島・中田会員に解読して貰った。また、母校佐世保北高の卒業生名簿に泥谷二郎、同綾子の名が記載してあり、連絡がついた。
(六)井手一郎佐世保史談会元会長も『談林』五〇号に「泥谷克軒先生の墓碑銘」との一文を記載していた。

三．泥谷一族の根拠地

(一)「泥谷」地名を調査してみると「大分県佐伯市堅田町泥谷」に存在している事がわかった。
(二)佐伯史談会会長の佐藤巧氏を紹介して頂き、泥谷氏に関わる史料を送付して頂いた。
(三)その史料の中で「高鍋藩秋月氏に仕えた『泥谷氏系図』によれば、その出自は佐伯氏五代政直の弟、堅田八郎惟助の次男泥谷次郎惟直に始まる。」また、『泥谷氏系図』には次のように記されているという。
(四)「我が先祖は大神姓、かつて豊後国泥谷の里に住す。佐伯殿と同姓なり、佐伯殿の息女が筑前の秋月に嫁ぐ、君これに因んで十五名挙げて従わしむ。」とある。

四．平戸での泥谷一族『藩臣録』より

四代以降八十八家　墓所は追廻馬場（平戸市岩の上町）
(一)初代　泥谷刑部　五女の付人で相浦に来る。
(二)二代　泥谷孫兵衛　松浦道秀様に相勤め候由と記載生國日向高鍋となっており移封地高鍋から父刑部共に相浦に来たと思われる。この時期初代藩主松浦鎮信（法印）
(三)三代　泥谷留兵衛　記録なし『宗護記』によれば今福家家老として登場する。一八代宗家松浦定と妻との間には二歳の男子がいた。幼名は源市と言い、長じて一九代松浦正となる。その子松浦信貞はやがて松浦猪右エ門信貞となり、江戸で旗本、勘定頭、禄も三千石になった。
(四)四代　泥谷又右衛門　高一〇〇石　松浦道秀の紹介　松浦肥前守鎮信（法印）代　御使番
(五)五代　泥谷茂右衛門　高一〇〇石　松英院様（松浦篤信）代
(六)六代　泥谷牧太八十八貞吉　高一〇〇石　合力米四〇俵　岩佐剛蔵の二男　院殿号　宝暦三年（一七五三）中老
(七)七代　泥谷八十八定居　高一〇〇石　合力米四〇俵　院殿号　安永七年（一七七八）早岐押役　九代松浦清（静山）代
(八)八代　泥谷八十八貞高　高一〇〇石　合力米四〇俵　院殿号　文化四年（一八〇七）御子様御付　一〇代松浦熙（観中）代
(九)九代　泥谷八十八貞周　高一〇〇石　合力米四〇俵　院殿号　弘化三年（一八四六）勘定奉行　嘉永元年（一八四八）水銀方
(一〇)一〇代　泥谷八十八恒太郎　高一〇〇石　合力米四〇俵　嘉永五年（一八五二）半左エ門組
(一一)一一代　泥谷八十八本三郎　高一〇〇石　合力米四〇俵　安政元年（一八五四）御近習
(一二)一二代　泥谷八十八貞一　高不明　慶応四年（一八六八）京都留守居役
〇一三代　泥谷淳一郎貞兼→一四代　泥谷貞凌（第五高等学校在学中病死）→一五代　泥谷　哲（佐世保中二回生）→一六代　泥谷具厚（若くして戦死）→一七代　泥谷二郎（佐世保北高二回生）（一三代以降は泥谷二郎氏の御教示による）

しかし、明治になって相浦に戻って戸長を務めた泥谷貞尚の名はこの中には見られない。

五．泥谷三平治家の家譜

※泥谷三平治家の墓所は三本松（平戸市鏡川町）という箇所にあった。しかし「昭和二年泥谷之墓」という大きな墓碑が祀られており、そこに集約されたものと推定されている。同時に梅鉢の家紋が残されていた。
(一)三代　泥谷利左衛門　生所平戸　高一〇〇石　道秀様より　御家召し出され大小姓
(四)四代　泥谷三平治　高一三〇石　大小姓
(五)五代　泥谷三平治　高一三〇石　大者頭奉行役　御役の内四ツ成　二〇〇石　松英院様代に大小姓　享保三年（一七一八）当御役格
(六)六代　泥谷三平治貞匡　高一三〇石　享保八年（一七二三）中老
(七)七代　泥谷三平治貞幹　高一三〇石　文化七年（一八一〇）中老　寺社奉行　静山・観中に仕え重要な役をこなす。
(八)八代　泥谷勘之助　高一三〇石　文化一三年（一八一六）藩主の帰国の際に、御供をして平戸に戻ってきた。
(九)九代　泥谷三平治　高一三〇石　文政元年（一八一八）中小姓頭　嘉永二年（一八四九）御用人
(一〇)一〇代　泥谷三平治　高一三〇石　文久二年（一八六二）御組使役

六．高鍋藩の泥谷一族

『高鍋町史』によれば、長男で高鍋に移封された秋月種長は高鍋藩の初代藩主になっている。三代種信の娘は松浦壱岐守隆信の室。四代種政の娘は松浦壱岐守棟の室。四女トヨは泥谷静磨直之の妻となっている。平戸松浦藩と高鍋藩の秋月氏との間に縁戚関係が続いていたと思われる。

高鍋藩では泥谷氏一族は要職についている。三代種信には三人の泥谷が家老、五代種弘でも一人、七代種茂の時代は一人、その他藩の重職に抜擢されている。また、藩主の弟が泥谷の養子に入ったり、妹が泥谷の妻になっている場合もある。平戸藩に比し高鍋藩での扱いに格段の差があっている。また、米澤藩で藩政の改革を果たした上杉鷹山（一七五一～一八二二）は、六代秋月種美の二男であった。

七．大分県佐伯氏に泥谷の里を訪ねる。（一部）

平成最後の四月二九日・三〇日、佐藤巧佐伯史談会会長と合流し、泥谷の話を聞き、「泥谷の里」を訪ねる機会があった。この地では、泥谷家がかつて大庄屋として活動していた。泥谷一族の墓地を見学できた。

令和元年度 長崎県地方史研究会 活動報告

●総会と春期研究発表会

令和元年七月二一日（日）、長崎県勤労福祉会館（長崎市桜町）において、令和元年度長崎県地方史研究会総会と春期研究発表会を開催した。総会に先立ち、一一時から理事会が開かれ、総会議案の審議が行われた。一三時から総会が開催され次の議案が承認された。

一、平成三〇年度事業報告
一、平成三〇年度決算・監査報告
一、令和元年度事業計画案
一、令和元年度予算案

総会終了後の一四時から、春期研究発表会が行われ、長崎史談会の松尾晋一、入江清佳が研究発表を行った。

●秋季研究発表会

令和元年度の秋季研究発表会は、佐世保史談会が担当し、令和元年一一月一七日（日）、佐世保市総合教育センター（佐世保市保立町）で開催された。研究発表会は一〇時三〇分から開始され、朝長則男佐世保市長の来賓挨拶の後、佐世保史談会から、祖谷敏行、中島眞澄が、それぞれ研究発表を行った。参加者は一般市民も含め一〇〇名を超す盛況であった。午後からは佐世保史談会の案内で、佐世保市内の史跡めぐりが行われた。

参加者は貸切りバスで弓張岳に向かい、弓張岳防空砲台跡、弓張岳展望台から佐世保湾内の旧海軍施設跡などを見学した。

なお、春期、秋季の各研究発表の要旨は、本「長崎県地方史だより」第七九号に掲載している。

令和元年度 県内各加入団体の活動状況

●島原史談会

一．一九年度の主な活動は次の三点

①島原図書館講座「郷土史を学ぶ会」（毎月第四土曜日）への積極参加と研究の発表
②島原地方の歴史文化研究関連情報を広く伝える「島原史談会だより」の発行
③県地方史研究大会や、他関連機関の講演会や発表会への積極的協力

二．活動報告

①郷土史を学ぶ会での学習内容
四月「松平忠房入封三五〇年」
五月「松平文庫・熊野行幸記の世界」
六月「島原藩主松平家墓所の調査」
七月「島原の乱時の一揆軍の兵糧・九年母」
九月「島原地変記」
一〇月「明治一五〇年・アジアのリゾート雲仙」
一一月「南串山馬場庄屋文書に見られる島原半島の歴史」
一二月「仕組まれた島原の乱一揆説」
一月「古典文学に親しむ・松平文庫の文献」
二月「故郷の寺院―西方寺」
三月　新型ウイルス流行で中止

他に島原城四〇〇年事業の講座と現地視察あり。

※毎回参加者には、一年間の内容をまとめた講義録が与えられ、助かっている。「研究誌・島原史談」が発行できない現在に、それを補う研究書として重宝がられている。

②「島原史談会だより」の発行

本年度は「潜伏キリシタン関連遺産」、「島原城・島原城下町築造四〇〇年」の記事が多かった。これを地域づくりにどう生かしていくか問われている。また本年度から市四〇〇年事業が始まり、その取り組みについての提案や報告など多い。

三．その他

三月から、新型コロナウイルス流行で活動もストップ状態。現在も続いている。ご多分に漏れず本会も会員の減少が目立つ。若い人の加入が少ない。それが地域史の研究普及や会の運営に障害となっている。その対策を模索している今日この頃である。

●西海市郷土史研究会

西海市郷土史研究会は、平成二九年六月に発足したばかりである。まずは合併によりできた地元西海市を知ることからと、発足年度から市内史跡探訪を実施している。

◎前年度事業で、悪天候により延期となっていた大瀬戸町松島の史跡探訪を四月二四日に実施した。地元ガイドの案内で松島炭鉱第四坑跡・西泊にある深澤與五郎幸可の墓などを訪問した。
◎令和元年度総会（六月五日西彼教育文化センター）市教委原口聡による古文書読み方研修会を併せて開催。
◎旧大村藩領地方史研究会（六月一六日、波佐見町）に参加した。
◎市内史跡探訪（一一月二六日）を実施。半島部（西彼・西海・大瀬戸）史跡の未訪問地を選んで実施した。

西彼地区は下岳唐ノ浦・四本堂公園内にある御茶の水・妙経寺（外観のみ）・切支丹教会跡。大瀬戸地区は、雪浦の塩田跡と海岸・瀬戸大番所跡。西海地区は西彼杵半島猪垣基点・長尾城・天久保遺跡・面高唐人墓。

案内は各地区会員による。各々自家用車に分乗して隠れた郷土の文化遺産を巡った。江島・平島の史跡探訪は、船便の都合から実施は当面難しいと判断した。

◎市教育委員会が主催する「ふるさと発見講座」が開催され、多くの郷土史研究会員が自らの研修活動と位置づけ参加した。「佐世保鎮守府と西海市」、川内野篤（一二月）。「天久保遺跡について」辻田淳一郎（一月）。「潜伏キリシタン関連遺産と西海市の関わり」川道洋平（二月）。
◎三月に予定していた研究発表会は新型コロナウイルス感染拡大を考慮し延期となった。充分な準備期間を設けて、近いうちに実施できるよう取組みたい。また、初めてとなる機関誌発行も検討している。

●大村史談会

◎監査（四月一〇日）・総会（四月一三日）
◎例会（研究発表会毎月第二土曜日）
四月一三日　萱瀬の鉄山　阪口和則
六月一五日　渋江氏～長島の荘・地頭から大村藩政までの経過について　中島俊人
七月二〇日　暦と暮らし―令和改元に寄せて　久田松和則
八月一〇日　石井筆子の世界　稲富裕和
九月二一日　潜伏キリシタンと島原天草一揆　大石一久
一〇月一二日　本経寺大村家墓碑にみる大村家の家紋　森崎兼廣
一一月九日　大村市内の金仏　野本政宏
一二月一四日　境目から見た大村領・平戸領の中世史　盛山隆行
一月一一日　明治期における大村藩の兵制について　熊野道雄
三月一四日　大村のキリシタン教界　岩永正彦

◎史跡探訪
五月一一日　旧大村藩領宮村地区
◎郷土史講演会
二月一五日　ミュージアムの将来～社会の中のミュージアム～
講演：ミュージアムの現在とこれから　米田耕司
報告：大村市歴史資料館の整備について　今村　明
◎旧大村藩領地方史研究会
六月　波佐見地区大会
中世波佐見の仏教文化～波佐見焼創始前の波佐見の歴史～　盛山隆行
◎長崎県地方史研究会
七月　総会・春季研究発表会（長崎市）
一一月　秋季研究発表会（佐世保市）
◎機関誌『大村史談』第七一号刊行
◎福祉センター郷土史講座（年間一〇回）に講師派遣

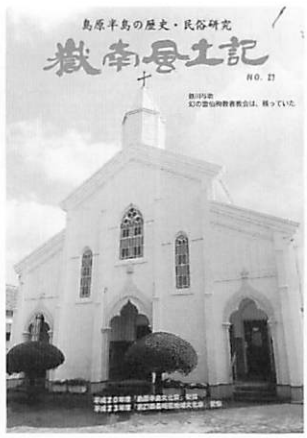
●有家史談会

各地方史研究会が、それぞれの地方史研究の総まとめとして重視しているのは、機関誌の発行だと思う。

長崎・諫早・佐世保などの中核都市から離れている、小さな地方史研究会は、人材や機関誌発行に要する費用の調達などさまざまな課題を抱えている。

各層の執筆者の支援と、会員の歴史研究の積み重ねによって、今年も機関誌「嶽南風土記」二七号を発行することができた。地方史研究にご理解とご支援をいただいている、南島原市をはじめとする関係の皆様に深く感謝している。

「嶽南風土記」二七号は、イエズス会日本管区長・デ・ルカ・レンゾ神父の「信仰の証しとしての『旅』を考える」、東京芸大名誉教授・中林忠良の「疎開のころ」、松尾卓次の「島原の二人の巨人」、根井浄の「修験山伏から神社祠官・祠掌へ」、大石一久の「キリシタン墓碑とその影響」、生駒輝彦の「鉄川与助幻の雲仙殉教者教会」、山下貞文の「庶民信仰の聖地・岩戸山」、松崎博文の「パール・バックと幻の映画『大津波』」、増田篤の「昭和諸道 町巡り」をはじめとして、若手会員・石司隆一の「室町中期・後期の肥前有馬当主」、中山和子の「碑に刻む―供養される 霊魂たち」など多彩な内容となっている。



また今年秋に、この南島原で開催が予定されていた、県地方史研究会の秋季研究発表会は、新型コロナウイルスのため中止となり、改めて来年秋の開催となった。残念ではあるが、今年からでも少しずつ準備を進めていきたい。

来年の事ではあるが、皆様には、日本と西洋の歴史が深く交差する南島原での大会へのご参加と、併せて雲仙・小浜・原城温泉で親交を深めて頂ければと思っている。時間の余裕があれば、天草キリシタン紀行もお勧めしたい。多くの皆様のご参加を待ち望んでいる。

●平戸史談会

令和元年度
○総会　四月二〇日（土）
○史跡探訪　五月一八日（土）
「正宗寺と周辺の史跡探訪」
世話人・伊嶋邦夫他
○松浦党研究連合会総会・研究会参加
六月一日（土）伊万里市
○平戸城下古地図めぐり（一）
六月一五日（土）
「正保の城下図との比較」事務局担当
○例会　八月三一日（土）
w.z.mulder 著「平戸のオランダ人」
発表・籠手田恵夫
○平戸城下古地図めぐり（二）
九月二九日（日）
「正保の城下図との比較」事務局担当
○松浦党研究連合会現地研修会参加
一〇月五日（土）　鷹島地区
○史跡探訪
一〇月一九日（土）
「亀岡日記を歩く（文学と絵画と歴史散歩）」
コース・江迎～潜龍～佐々
ナビゲーター　伊嶋邦夫・籠手田恵夫・川谷康男・松本博之
○平戸津吉地区現地研修会
一一月三〇日（土）
・岩谷神社・下方街道（トンボ堂）・古田神船新田・長泉寺・古田本陣
講師　吉居辰美
○例会　一二月二一日（土）
「沖図書館きれぎれ」　発表・川渕　龍
○例会　令和二年二月一五日（土）
「松浦史料博物館所蔵資料・絵図類資料熟覧と解説」　発表・久家孝史
○平戸史談会史跡ボランティア整備作業
令和二年三月一四日（土）
平戸藩重臣　佐川主馬親子墓所清掃作業

本年度は新規会員の加入があり、会員数二七名となった。新規会員獲得のため、史跡の見学等を多く取り入れたこともその要因と考えられる。

史跡見学会では、平戸城下周辺を江戸時代の地図をベースに散策し、古参の会員も新規会員と歩くことにより、あらたな発見や見識を深めたようである。

昨年度から、毎年三月を会員によるボランティア作業日として、平戸の歴史に関わりながらも、今は荒れてしまった墓地・史跡の整備を行うようにした。会員、市民に好評である。

今後も新規会員の獲得に向け、活動する計画である。

●雲仙市瑞穂町史談会

○会誌原稿の募集継続
第二三号発刊のため原稿募集を行う。
令和二年度中の発刊を目指す。
○瑞穂中学校の郷土学習を担当（九月一二日）
中学一年生の郷土学習の講師として「瑞穂町の古墳と城跡について」解説並びに主な古墳と城跡の現場説明を実施した。
○瑞穂町文化祭への対応
第四二回文化祭の作品展（一〇月二六日、二七日）に於いて、約一四〇〇点余りの作品の受付から展示終了までの管理を担当。
○他郷土史勉強会との交流（一月二六日）
故下村脩博士（ノーベル化学賞受賞）の父の実家である瑞穂町西郷伊古にて、江戸時代は庄屋であった同家に残る藩境の石碑について、下村宣子及び瑞穂町史談会会長が解説を行った。
○歴史研究発表会への出席
・七月二一日　長崎県地方史研究会・研究発表会に出席。（長崎市）
・一一月一七日　長崎県地方史研究会・秋季研究発表会に出席。（佐世保市）
・一二月一六日　南島原市世界遺産登録一周年記念シンポジウム「原城の歴史的意義及びパネルディスカッション」に参加。（南島原市）
・二月一五日　大村史談会・郷土史講演会「大村市歴史資料館の整備について」に参加。（大村市）

●長崎近世文書研究会

本会はここ数年、福岡県立図書館所蔵の「黒田家文書」の中から、長崎港警備関係の文書の研究をしている。

平成二八年九月には「長崎史料叢書第十二集」にまとめて刊行した。

その後、引き続き「嘉永七年長崎往来日記」や「甲斐守様四月長崎御越之事」などを読解してきた。これらは幕末期、異国船が日本近海に来航する緊迫した状勢の中で、長崎警備の役割を担う姿が見えてくる内容である。

これらをまとめて、今年「第十三集」として発刊するための準備作業をしているところである。

●長崎史談会

○公開講座・史跡めぐり

昨年度に引き続きテーマを「長崎の港」として活動を行った。長崎学公開講座は六回開催し、参加者は延べ五〇七名であった。長崎学史跡めぐりは、立神、西泊、木鉢、小瀬戸、女神方面の台場跡を中心に五回開催し、参加者は延べ一九八名であった。公開講座、史跡めぐり共に、会員外の参加者が多く見られた。

○古文書公開講座

今年度は二〇回開催し、参加者は延べ三七七名であった。昨年同様、初心者や学生など幅広く参加を呼びかけた結果、一定の成果が見られた。

○定例会

会員相互の研究発表の場である定例会は、毎月開催しているが、今年度は一一回開催した。毎回幅広いテーマでの研究発表があり、参加者数は延べ四二六名であった。

○掃苔会活動

長崎市内の保存、顕彰すべき墓地や史跡の清掃、調査を行う「掃苔会」活動は、今年度は一〇回行い、参加者数は延べ九一名であった。

○なお新型コロナウイルスによる、感染症拡大防止のため、本会も三月以降の活動を殆ど自粛しており、このためこれまで報告した諸活動は、回数、参加者数とも例年に比べ減少した。

○「長崎学レポート」の創刊

今年度から新機関誌「長崎学レポート」を発刊した。年六回開催している長崎学公開講座の発表内容の要旨を掲載するもので、年度三回発行する。初年度である今年度は、令和元年九月に創刊号を、令和二年二月に第二号を発行した。令和二年五月に第三号を発行する。版型はA四版で四頁、カラー印刷である。会員のほか希望者には無料で配布している。

○他団体との協働活動としては、長崎県との協働で、長崎市における黄檗文化を更に深く理解していただくため、市内の唐寺を巡る「学さるく」を二回に分けて開催した。一回目は一〇月二七日、大音寺から興福寺を巡り、興福寺で煎茶を楽しんだ。二回目は一一月三日、福済寺後山の唐僧墓地から聖福寺を巡り、最後に聖福寺で普茶料理を味わった。それぞれ食事付きなので、有料であったが、二回とも三〇名（定員）の参加者があり大変好評であった。

その他、長崎市主催の「歴史の学校」や公民館講座に、例年通り講師を派遣した。

中でも一〇月三〇日、市内桜馬場中学校一年生（一五〇名）の、外海出津地区の世界文化遺産を学ぶ歴史学習に、本会から講師を一〇名派遣した。本会にとっても貴重な体験となった。新年度もNPO法人として、幅広い活動を行っていきたい。

●長崎女性史研究会

二〇一九年度は地域女性史研究会の例会を長崎で開催したために、その準備などが活動の中心となった。

地域女性史研究会は、全国各地の女性史研究会の研究交流の場として、二〇一四年に発足。「ここに生き、ここを超える」をスローガンに、地域社会の中で、いのちと暮らしを支え、文化を創造し、時代を切り開いてきた女性たちを歴史の中に位置付けることをめざして活動している団体である。

長崎女性史研究会では、その第一四回例会を共催。一一月九日、長崎市立図書館、新興善メモリアルホールで行った。「戦争と原爆と長崎の女たち」をテーマに、被爆地長崎において、女性たちが戦争をどう受けとめ、平和をどのように構築していこうとしたかを検討した。

本会会員は次の研究発表を行った。

・四條知恵「純心女子学園の原爆の語り」

・山本芳江「戦時下における女子学生の暮らしと被爆体験」（松本悦子のビデオによる被爆証言を含む）

・国武雅子「女性の被爆体験と平和運動」

県内外から約五〇名の参加者があり、充実した研究会となった。

他の例会の内容は次の通りである。

・四月　室塚久江の聞き取り……婦人公論読書会（椿の会）の初期の活動について

・六月　木村泰子「俳人・中尾杏子」

・一月　大田由紀「長崎くんちと女たち」

・二月　木永勝也「長崎の近現代史研究の課題」

●諫早史談会

○四月二〇日（土）定期総会

平成三〇年度事業・監査報告

平成三一年度事業計画案・予算案

○五月一八日（土）五月例会

「諫早家の出島見学」　大島大輔

○六月一五日（土）六月例会

「会誌五一号発刊配布」会誌配布後、発表者の内容紹介

○七月二〇日（土）七月例会

若杉春后翁を忍ぶ会

※雨天の為本堂で法要、墓地清掃中止

○九月二一日（土）九月例会

「佐賀藩諫早領」　大島大輔

諫早市美術・歴史館主催へ参加

○一〇月一九日（土）一〇月例会

「江戸時代の諫早の寺社について」

大島大輔

○一一月一七日（日）一一月例会

「長崎県地方史研究会秋季研究発表会」

○一二月七日（土）一二月例会

「清水山鏡圓寺について」　光冨　博

○一月一八日（土）

「多良海道と歴史の道百選」　丸山雍成

歴史の道観光・文化交流推進協議会主催へ参加

○一月一九日（日）一月例会

「日本の書と美」　徳山　光

諫早市美術・歴史館主催へ参加

○一月二五日（土）

県民表彰及び諫早市教育委員会表彰祝賀会（於水月楼）

山口八郎・織田武人・光冨　博・川内知子、が受賞。

○二月一五日（土）二月例会

「西郷氏一族」　近藤宗顯

○二月二二日（土）

「古文書でみる諫早眼鏡橋」　大島大輔

諫早市美術・歴史館主催へ参加

三月例会は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止。

【関連事業】

「諫早古文書研究会」　於諫早市美術・歴史館

六月より毎月第一・三土曜日一〇～一二時

「諫早の歴史を歩く会」
①一ノ瀬口～矢上宿　②矢上宿～喜々津駅　③喜々津駅～諫早市役所　④西諫早駅～岩松駅　⑤岩松駅～松原駅
※④・⑤は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止。

●佐世保史談会

全会員協力して佐世保市及びその周辺の郷土並びに関連する歴史について研究し、以て地域文化の向上発展に寄与する。

一．研究発表
○「引地家所蔵の学務文書から分かること」　中田敏子
○「鎮守府のまち佐世保の近代化遺産」　佐世保市教育委員会　川内野篤
○「古墳を造った人々・鬼塚古墳の調査成果」　世保市教育委員会　松尾秀昭
○「肥前刀の魅力と観賞」　日本美術刀保存協会　田中興人・和田末吉
○「幕末を生きる旗本領今福の人々」　豊島幸子
○「江戸時代の食糧難と農漁民の移住」　郷土史研究家　前川雅夫
○「旧山口部（村）学務委員引地造の活動」　中田敏子
○「信長に仕えた森一族の末裔を訪ねて」　垣田鉄郎
二．長崎地方史研究会佐世保大会発表
○「佐世保鎮守府設置への考察」　祖谷敏行
○「泥谷（ひじや）一族の研究」　中島眞澄
三．論文発表（機関誌「談林」記載）
○「泥谷一族の調査と今後の展望Ⅱ」　中島眞澄
○「俊兵衛（造）の家計簿二」　秋山俊雄
○「遊女からの手紙」　豊島幸子
○「学務委員引地造（一）小学校教育開始期の相浦地域における活動」　中田敏子
○「近代水道の父吉村長策佐世保に眠る」　酒見莞爾
○「平成から令和へ」　平川定美
四．研修旅行等
○長崎県地方史研究会佐世保大会実施
○歴史講話七回
○史跡探訪一回（佐世保市俵浦一帯）
三月の発表会・史跡探訪各一回はコロナウイルス感染防止のため自粛中止となった。

●波佐見史談会

昨年度報告しておりませんでしたので、二ヶ年度分を報告いたします。

◎平成三〇年度
三月　総会
四月　町外史跡探訪（福岡県八女市周辺）
会員他一般の方々も参加し、貸切バスで移動。八女丘陵古墳群、岩戸山歴史文化交流館、八女伝統工芸館見学
六月　県地方史研究会総会・発表会出席
一〇月　波佐見町民文化祭出展
町内外史跡探訪写真資料展示
古文書「諸事控」・「地震災害等古文書資料」解読資料、偉人の書
一一月　旧大村藩領地方史研究会西海地区大会へ参加
一一月　町内史跡探訪（甲・乙長野郷、協和郷、志折郷）
墓地、祠、石碑、神社、遺跡
一一月　大村史談会郷土史講演会へ参加
一一月　県地方史研究会諫早大会参加
一月　新年会
三月　歴史講演会
「波佐見の大村藩士について」
講師　大村史談会　中島俊人
その他
役員会（五月、一二月、二月）
全体会（一〇月）
座談会（六月、七月、九月）
古文書勉強会（毎月一～二回）
県民大学古文書講座（教育委員会主催）受講（一〇月・一一月）
文化誌「波佐見文化」へ投稿
冊子「波佐見二十二郷風土記（復刻版）」の継続販売
◎令和元年度
四月　総会
六月　旧大村藩領地方史研究会波佐見地区大会開催
「中世・波佐見の仏教文化」
発表者　会員　盛山隆行
午後　文化財・史跡巡見（教育委員会、金屋神社、東前寺）
今年度は本会が担当地区で、開催準備等で多忙となったが、町内外から多数参加して頂き、無事終えることができた。
七月　県地方史研究会総会・発表会
一〇月　波佐見町民文化祭出展
町内史跡探訪写真・DVD、渋川家ゆかりの資料・古文書「諸事控」解読資料、旧大村藩領地方史研究会発表資料・写真
一一月　県地方史研究会佐世保大会へ参加
一一月　町外史跡探訪（佐賀市周辺）
船塚古墳、河上神社、肥前国庁跡、さが水ものがたり館、博物館、史料館
二月　大村史談会郷土史講演会参加
二月　町内史跡探訪（雨天中止）
その他
役員会（五月、八月、一月、三月）
全体会（六月、九月）
古文書勉強会　一七回（月一～二回）
県民大学古文書講座（教育委員会主催）受講（一一月・一月）
文化誌「波佐見文化」へ投稿
冊子「波佐見二十二郷風土記（復刻版）」の継続販売
天候不順等により計画を延期、また新型コロナウイルスの感染防止対策のため中止して、計画の一部が実施できなかった。次年度へ持ち越しである。
会員が高齢化のため、幅広く会員の入会を募り、より魅力ある活気に満ちた会にするべく、試行錯誤している。また地域に埋もれた歴史文化資料等を発掘・保存整理し、後世に語り残すべく思いである。
なお、令和三年一月に待望の「歴史文化交流館（仮称）」が開館予定で、現在古民家の改修工事中である。有効な活用が出来る様に願っている。

本文中の氏名の敬称は全て省かせて頂きました。

事務局より

新型コロナウイルスの蔓延が止まることを知らない。このため私達の日常の生活は厳しく制限され、未だ出口が見えない状況である。
本研究会でも六月の総会は秋に延期し、秋の発表会は中止せざるを得なくなった。楽しみにされていた皆様には申し訳なく思っている。一刻も早い終息を望むばかりである。

長崎県地方史だより　第七九号
令和二年六月一日
編集・発行
長崎県地方史研究会
長崎市江戸町五番八号
一ノ瀬中央橋ビル五階
NPO法人長崎史談会　気付
印刷　有限会社　正文社印刷所
（長崎市魚の町六番六号）